

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究

「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」共催：日本文化人類学会「次世代育成セミナー」東日本会場

日時： 2016年11月6日（日）13:00～19:00

参加者：41名(内外国人 2名)

会場： 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 301・306室

「文化/社会人類学セミナー」

プログラム（第1会場 306室）

13:00～13:50 開会の挨拶：西井涼子（AA研）

講演（トーク・セッション）：松田素二（京都大学）×小田亮
（首都大学東京）「抵抗論の現在」

13:50～14:00 休憩

14:00～15:30 司会：深澤秀夫（AA研）

白福英（総合研究大学院大学）「誰が牧畜民なのか？誰が牧畜民でないのか？—内モンゴル・オラド後旗の事例を中心に」
コメント：栗田博之（東京外国語大学）・河合香吏（AA研）
質疑応答

15:30～15:35 休憩

15:35～17:05 司会：深澤秀夫（AA研）

田川夢乃（広島大学大学院）「フィリピンのグローバル化に関する今日的動態—コールセンター産業に注目して」
コメント：小田亮（首都大学東京）・清水昭俊（AA研）
質疑応答

17:05～17:15 休憩

17:15～18:45 司会：深澤秀夫（AA研）

生駒美樹（東京外国語大学大学院）「「負債」と「借り」の民族誌—チャをめぐる農家と労働者の関係」
コメント：箕曲在弘（東洋大学）・佐久間寛（AA研）
質疑応答

18:45～19:00 講評：西井涼子（AA研）・深澤秀夫（AA研）

閉会の挨拶：西井涼子（AA研）

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

プログラム（第2会場 301室）

14:00～15:30 司会：西井涼子（AA研）

山内健太郎（首都大学東京大学院）「台風常襲地の災害観に関する一考察—鹿児島県坊津町の事例を中心に」

コメント：林勲男（国立民族学博物館）・外川昌彦（AA研）

質疑応答

15:30～15:35 休憩

15:35～17:05 司会：西井涼子（AA研）

岡本圭史（九州大学大学院）「せめぎ合う霊力—ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教への改宗」

コメント：岡崎彰（AA研）・吉田ゆか子（AA研）

質疑応答

【内容】

本セミナーは、若手研究者による博士論文の完成や学術誌への投稿を支援するため、第一線で活躍する研究者との議論の場を提供する試みである。受講生は、論文の草稿を事前に提出し、セミナー当日にその概要を口頭で発表する。これに対して、各2人のコメントーターから助言や批評がある。2015年度につづき日本文化人類学会次世代育成セミナーとの共催により実施した。

所員の西井涼子の挨拶の後、まず松田素二（京都大学、日本文化人類学会会長）と小田亮（首都大学東京、日本文化人類学会次世代育成セミナー実施運営委員会委員長）により「抵抗論の現在」というタイトルによる講演（トークセッション）が行われた。小田の質問に松田が応じる形で自由闊達に議論を行うという試みであったが、聴衆からは、「日本文化人類学会の大会における講演とは異なり、くつろいだ雰囲気の中で貴重な講演を聞くことができた」、「対談に近い形式であったことも、よい効果を上げていた」等の感想がよせられるなど、おおむね肯定的な評価が得られた。

講演後、ふたつの会場に分かれて5名による約40分の口頭発表がおこなわれた。各発表者から事前に提出された要旨は下記の通りである。

*

・生駒美樹「『負債』と『借り』の民族誌——チャをめぐる農家と労働者の関係」

本研究は、「負債」と「借り」で結ばれる人々の関係を、文化人類学的視座から検討することを目的とする。具体的には、ミャンマー最大の茶産地シャン州パラウン自治区ナムサン郡で茶生産に従事する少数民族パラウン人（モン・クメール系）を事例として取り上げ

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

る。本稿では、チャの収穫から加工に関わる生産者のうち、農家と農業労働者の関係に限定して分析する。

本研究の問題意識は、矛盾する農業労働者像をいかに捉えるかにある。彼らは、経済的に村の下層に位置づけられる一方で、時としてチャ園を持つ農家に対し優位に立つ。この矛盾を明らかにするために、本稿では「負債」と「借り」に着目する。サルトゥー＝ラジュ [2014]は、貨幣経済が、これまで漠然と相手への義務を表すにすぎなかった「借り」を計量化することにより「負債」に変え、貨幣によって容易に清算できるようにしたと指摘する。しかし、本事例の農家と農業労働者のやりとりを見てみると、それらは全て数値化され「負債」として帳簿に記入されているにもかかわらず、清算されることはない。また、彼らの間には「借り」のような感覚が存在するようにみえる。そこで、本稿では、「負債」をなぜ清算できないのか、あるいはしないのか、そしてなぜ農家と農業労働者双方が「借り」を感じるのか、これらの問いを明らかにすることによって、矛盾する農業労働者像の背景を明らかにしたい。分析の際には、チャという植物の性質にも着目する。

参考文献：サルトゥー＝ラジュ、ナタリー 2014(2012) 『借りの哲学』(高野優監訳、小林重裕訳) 太田出版

・岡本圭史「せめぎ合う霊力ーケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教への改宗」

ケニア海岸地方に住むドゥルマと呼ばれる人々の間では、妖術や憑依霊の攻撃から身を守る手段として、キリスト教が人気を集めている。本発表の目的は、妖術への対処法としての改宗をより正確に捉える視座を切り開くことである。はじめに、改宗概念を伝統宗教からの離脱に続くキリスト教の提示する宗教的信念の受容と切り離して捉える視点を提示する。次に、信徒達の語る体験談を資料として、キリスト教が妖術への対抗策として受容されていることを指摘する。その上で、悪魔崇拝者と呼ばれる人々をめぐる語りを基に、ドゥルマにおけるキリスト教がその内部に隣人の中に潜む妖術使いにも似た敵を抱え込んでいることを示す。妖術使いや悪魔崇拝者をめぐる一連の語りを基に指摘されるのは、妖術から人々を完全に解放すると期待されたキリスト教が、実際には、霊的脅威とのより激しい対立図式の中に信徒達を導入しつつあるという点である。一連の議論を通じて、ドゥルマにおける改宗過程を、キリスト教が妖術観念と拮抗しつつ霊的世界の再配置を引き起こす過程として描きだすことを試みる。

・田川夢乃「フィリピンのグローバル化に関する今日的動態ーコールセンター産業に注目してーThe Contemporary Dynamism of Globalization in the Philippines: Focusing on the Call Center Industry」

本研究は、グローバルなワークフローにおける今日的な労働のあり方を、トランスナショナルな分業の拡大によって経済成長を続けるフィリピンの事例から検討する。ここでは近年フィリピン経済を牽引する産業のひとつであるコールセンター産業とその労働者に焦

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

点を当てる。

2000年以降、十数年の間に、フィリピンでは国際的な分業体制を形づくるビジネス・プロセス・アウトソーシング産業（Business Process Outsourcing: 以下 BPO 産業）が著しく成長している。2016年現在、BPO 産業は同国の国内総生産の約 7%を占め、約 130 万人に雇用を創出しており、BPO 労働者はフィリピンのモダン・ヒーローとしてまなざされている。中でもコールセンター産業は、BPO 産業の総売上高の 70%を占め、半数近くの約 63 万人が従事しており、今やフィリピンは世界トップの英語圏コールセンター拠点地となっている。

しかし、こうした経済的イニシアティブの一方で、従来の人文社会科学における研究では、同産業労働者に対してグローバリゼーションにおける従属者、被影響者といった見方がなされてきた。このような視点は、フィリピンの人びとの間に流布するコールセンター労働者のイメージにも共通しており、彼（女）らはしばしば専門性に欠ける未熟練労働者であるとみなされる。だが、これらの見方は、コールセンター労働者を「一般性－特殊性－交換可能性」の軸から把握しており、それは比較可能で代替可能な「労働者（労働力）」としての側面のみを照射しているだけである。

そこで本研究では、コールセンター労働者らの労働実態と彼（女）らの働く動機を明らかにする。すなわち、個々の労働者の文脈や経験に基づく比較不可能で代替不可能な側面から、コールセンター労働者となることが、個々の労働者にとってライフサイクルにおける再出発に向けてのステップ・ストーンになっていることを明らかにする。

・白福英「誰が牧畜民なのか？誰が牧畜民でないのか？－内モンゴル・オラド後旗の事例を中心に」

本稿は、内モンゴル・オラド後旗における牧畜に従事する漢民族と牧畜をしないモンゴル民族を研究対象とし、彼らをもつ「牧畜民」というアイデンティティに注目し、内モンゴルという個別社会の文脈におけるローカルタームとしての「mumin（「牧民」＝牧畜民という漢語）、マルチン（牧畜民というモンゴル語）」/「マルチン・ビシ（非牧畜民というモンゴル語）」の境界を決定している要因について考察したものである。

内モンゴルにおいては同じモンゴル民族の間に差別が存在している。それは、牧畜を生業とするモンゴル人が農耕で生計を立てているモンゴル人を「偽物のモンゴル族」とみなすというものである。一方、内モンゴルに移住してきた漢民族の一部は牧畜に従事していて、自らを「牧畜民」と名乗っている。本稿ではこれがモンゴル民族側からどのようにとらえられているのだろうか、と疑問を提起した。

この疑問を解くために、まず、牧畜社会一般における内モンゴルの「牧畜」の位置づけを明確にした。次に、牧畜に従事する漢民族と牧畜をしないモンゴル民族の事例を通じて、内モンゴルのローカルな文脈の中で牧畜民と非牧畜民の境界がどのように区別されているのかを提示した。最後に、農耕民と牧畜民の関係を扱った研究の中で本稿での事例を位置

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

づけ、牧畜民と非牧畜民の境界を決定している要因を明らかにした。

・山内健太郎「台風常襲地の災害に関する人類学的研究：鹿児島県坊津町の事例から」

D.シュナイダーは、ヤップ島のタイフーンの実例から米国とは異なる島民の災害観を描き出している。彼は物質的な要素とそれに伴う社会関係への依存度合いの差異によるものであると考察する。近年では災害を自然現象として捉えるだけでは収束しない様々な問題が表出されている。そうであるとすれば、物質的な対策・対応に依存しつつある我々はいかにして災害と向き合うべきなのであろうか。

鹿児島県南さつま市坊津町は、戦前・戦後を通じて幾度となく大型台風の経験を通じてきた地域である。とりわけ、昭和20年「枕崎台風」、昭和26年「ルース台風」の大型台風は戦後直後に襲来し、当該地域に甚大なる被害を与えた。この2つの大型台風について、人々の語りの事例を年齢集団・親族等の社会関係上の特質とともに考察する。人々の語りには、戦後集落を立て直すコンテクストとともに互助協働の様子が語られている。

上記に基づき、本発表では「台風常襲地」と称される当該地域を対象に、周期的に発生する台風とともに生活する人々の営みから災害と社会の関係性について再考をおこないたい。

キーワード：慢性的な脅威、一過性のカタストロフィー、災害観

参照文献：David M. Schneider 1957 Typhoons on Yap. In Human Organization 16(2):pp.10-15 National Research Council

*

それぞれの発表に対して、2名のコメンテータによる約15分のコメントがあった。かならずしも発表者と地域や専門を同じくするコメンテータばかりではなかったが、発表者からは、「今までの指導教員の指導と違う側面からのコメントが刺激的でした」、「学外の先生に論文を読んでいただきコメントをいただけるという機会はなかなかありませんので、非常に貴重な経験をさせていただきました」、「普段のゼミ指導とは異なる角度からの指導を、十分に時間をかけて得られる」といった、肯定的な評価が得られた。また今年度は総じてフロアーからの質疑やコメントも活発であり、フロアーからの発言者とコメンテータのあいだで異論が交される場面も見られた。

全発表が終わった後、本研究所の西井と深澤秀夫から各会場についての講評があった。最後に西井が閉会の挨拶を述べ、本セミナーは幕を閉じた。

(文責：佐久間寛)